

蝕まれる合理主義

—占いに頼る「経営の神様」—

古いデータだが、全国の有権者3000人に行った朝日新聞の調査によれば、超自然を信ずる人は50%に達する（1981年5月5日付朝日新聞）。

縁起やジンクスを気にする人46%
大安、仏滅、友引を気にする人47%
死後の人間の魂の存在を信じる人60%
人間や自然を超えた大きな存在を感じる人54%
科学が進歩しても全てが解明されるとは思わない人71%

この傾向は今でもさほど変わらないのではないか？

バブルがはじけてから、安易に占いにすがる傾向が広がっているようである。経営コンサルタントの船井幸雄氏は「ほとんどの経営者は、易者や霊能者と付き合う。だが、悩みは消えないから人生相談をしに来る」という（1996年11月27日付日本経済新聞）。

ほとんどの経営者、というのは誇張であろうが、わたしの経験でも、易者や霊能力者に頼る経営者が多いのは事実。悩める経営者は、「教祖」に悩みを打ち明け、心の支えを求める。

最近では、易道学校の受講生に、企業の人事担当者が多いとのことである。リストラの時代に人相や姓名判断を人事に役立てようとしているのだという（2000年1月21日付朝日新聞）。

上場企業のトップでさえ占いに凝る。

まずは、「経営の神様」といわれ、電電公社の民営化に力をふるった元NTT会長の真藤恒氏。

氏は37、8才の頃、人相を見てもらったことがある。氏はリクルート事件に連座して有罪判決が確定した直後、過去を振り返って語った（1990年10月27日付朝日新聞夕刊）。

人相見は、僕の将来を事細かに説明してくれた。不思議なことに今までその通りになっている。当時は、そんなに長生きしないよ、と思ったが、「70才前後と、80才前後に大きな変革がある」といわれた。電電公社総裁になったのは70才。判決を受けた今、80才だ。

もう、余命はいくばくもないと思うが、その人相見は「90才まで手が届く。80代にも、おもしろいことがある」とも予言していた。

真藤氏は人相見の占いを信じているようだが、長生きすれば、誰でも何度となく人生の大きな節目があるもの。

いつまでも仕事も順調で、大病にもかからず、肉親をも失わず、安穏な人生を送る人などありえない。

人相見のこの曖昧な「予言」は、いかようにも解釈できるし、仮に当たったところで偶然にすぎない。この人相見程度の「予言」なら、わたしでさえできる。

「ドクター合理化」といわれた真藤氏が占いを信じるとは意外である。

——わたしの会った経営者たち——

わたしも占いやジンクスを気にする人を、仕事がらみで知っている。

(ケース 1)

ある2世社長の場合。人柄は良いが、経営者としては凡庸で、部下からも軽んぜられている。夫人はアメリカの大学を卒業した才色兼備の人だが、数年前から夫婦関係が悪化。同じ頃会社も赤字になりお先真っ暗な頃、知人から印相が悪いといわれ、「印相彫刻の権威」を紹介された。

くだんの印相鑑定士は八方位図を示し、「今まで使っていた印鑑は愛情運や才能運から見て問題がある。健康運から見てもダメ。印鑑は夫が大きく妻が小さいのが原則なのに、夫婦が使っていた印鑑は同寸で不可」と改印を強く勧める。

驚いた社長は、鑑定士に幸運を呼ぶ開運印鑑を頼み、銀行印、実印、認印を夫婦そろってつくり替えた。その費用合計200万円。社長は「五黄土星」、夫人は「八白土星」でいずれも高級本象牙の印材である。

印鑑代だけではなく、紹介してくれた知人にも、お礼に20万円を支払った。

しかし、その後も経営は好転せず、夫婦仲も悪化するばかり。先の知人に相談したところ、今度は占い師を紹介された。以後、占い師が会社に頻繁に出入りし、「経営指導」するようになった。さすがに夫人もあきれ、今は、離婚手続の最中である。

(ケース 2)

あるメーカーの会長は、異常に縁起をかつぐ。

アメリカ企業相手の合弁契約にサインする日も、「大安の日」に固執する。部下は稟議を上げる時に、わざわざ「この日は大安です」と稟議書に付記するのを例とする。

子会社を設立する際「新社名は字画が悪い」と言って、それまで内定していた社名を変更。新社名に変えるため、数千万円のコストがかかることになった。取締役会では「字画が悪いから変えた」と聞いて、誰も疑問をはさまない。

字画で会社の盛衰が決まるはずがない。そのはずがないと役員もわかつていながら、逆らえない。これが、結構マスコミにも出る某上場会社の実状である。

(ケース 3)

あるサービス業界の専務は、40代後半から超能力に熱中し、最近では靈に興味を持ち始めた。ビジネスで行詰まった夜は、自室に籠もって靈とのチャネリングをしているという。本人もそれを否定していない。

ビジネス上の決定もコロコロと変わり、部下はうんざりしているが、誰も阻止できない。いつか何か起きるのではないか、と部下は不安げである。マスコミにチャネリングの話でも漏れたら、どうなることかと恐れている。

——不幸にあうと精神の免疫力が低下する——

わたしだとて、初詣にはたまにはオミクジを引いて、家族で興じる。だが、それは一時のなぐさみにすぎない。だから、経営者の例を見聞しても、わたしは、本気だとは思っていなかったが、どうやらそうでないらしい。

3つの例に共通のことは、いずれの経営者も、精神的に危機的状態にあることが注目される。ケース1では夫婦関係は悪化し、経営も悪化している。ケース2の会長は、夫人と離婚し本人も大病にかかるつて以來縁起をかつぐようになった。ケース3の専務は、本人は隠しているが、重い糖尿病らしい。専務もまた夫人との間は極めて悪い。家ではほとんど口も聞かない状態らしい。

人は不幸にあうと、精神の免疫力が低下する。人間は決して合理的な存在ではない。精神が病めば、何かにすがりたくなる。だから、縁起をかつぐ人を一概に批判することはできない。

わたしも40代と50代の初めの2、3年、健康体なのに何となく体調が不全で、精神的に大いに乱高下した(今では「男の更年期」でホルモンのバランスが崩れていたと思っている)。だから占いに頼る気持ちもわからないではない。

だが、「怪力乱神」にはまってしまうと、正確な原因の追及がおろそかになり、従って正しい対策もとれない。そうなると一層不幸の泥沼にはまりこんでしまう。

危機に直面したり、不幸に陥ったりしたときこそ、まさに合理的に考えることが一番大切なときである。それなのに怪力乱神に心の支えを求めては、一瞬気持ちは楽になってしまって、事態は一層悪化する。だから、心の弱さを何とか意志の力で乗り越えて合理的に考えることが必要だろう。

人は精神的な支えを持たないで生きることはできない。心が満たされないと怪力乱神が心に忍び込む。縁起やジンクスを気にする人は、自分で考えることが下手な人である。だから、心の支えとなる「哲学」を日頃から意識して開発することが大切である。

——吉凶は人によりて日によらず——

兼好法師や福沢諭吉は極めつきの合理主義者であった。

鎌倉末期頃の俗信では、赤舌日（しゃくぜちにち）が不吉な日として忌み嫌われた。この日は6日に1度やってくる。昔の陰陽道では赤舌日を忌み嫌わなかつたのを、最近では不吉だということになっている。

兼好法師は、これを愚かな風潮と批判する（『徒然草第91段』）。

この日ある事、末通らずと言ひて、その日言ひたりしこと、したりしこと、かなはず、得たりし物は失ひつ、企てたりし事成らずといふ、愚かなり。吉日を撰びてなしたるわざの、末通らぬを数へて見んも、また、等しかるべし。

赤舌日になすことは、うまくいかず、企ては成功しないというが、愚かなことである。赤舌日を避け吉日になした場合でも、うまくいかない例を数えてみたならば、赤舌日の場合と同じであろう。

兼好はさらにこう続ける。

「吉日に悪をなすに、必ず凶なり。悪日に善をおこなふに、必ず吉なり」といへり。吉凶は人によりて日によらず。

吉か凶かは、行いの良し悪しによって決まるので、行う日が良い日か悪い日かによるのではない。吉日でも、悪事をはたらけば、つねに不吉である。不吉な日でも、善行をなせば、つねに縁起が良い。吉凶は人によって決まるのであり、行う日によって左右されるものではない。

「吉凶は人によりて日によらず」とは、何とも名言である。ケース2の会長が、徒然草を読んでいれば、彼の経営スタイルも違っていたであろう。

兼好は、不可思議なことや怪しげなことは信じるのは、教養の低い者だという。

そらごと
ともかくにも、虚言多き世なり。ただ、つねにある、珍しからぬ事のままに心得たらん、よろづたがふべからず。下ざまの人の物語は、耳驚く事のみあり。よき人はあやしき事を語らず。（『徒然草』第73段）

とにかく、うその多い世の中である。ただ、物事はありふれた珍しくもないことと心得ていれば、万事間違ひはない。

下賤の人の話は、聞いてびっくりすることが多い。教養のある人は、不思議なことは語らないものである。

要するに、怪力乱神を信じるのは下賤の人で、本当に教養ある者のすべきことではないといふのである。何とも耳の痛い話ではある。

——稻荷の神罰が下るとは大うそだ——

福沢諭吉は幼少より独立心が強く、合理的に物事を考える人物であった。世俗的な慣習に捕らわれず、当時の日本人には珍しいアウトサイダー的な傾向があった。彼は長崎、大阪、江戸、アメリカ、さらにヨーロッパを見聞し、自己の視野を拡大した。

福沢が、『学問のススメ』や『西洋事情』など、あれだけの知的作業を成し遂げたのも、彼が日本人には珍しい合理的精神の持主であったからである。世俗的な習慣を疑い、他人の考えに惑わされず独立自尊の性癖があったからである。

既に10代の初めには、諭吉は世の中のしきたりや慣習を軽蔑している風があった（以下、『福翁自伝』から引用）。

兄さんのいうように、殿様の名の書いてある反故を踏んで悪いといえば、神様の名のあるお札を踏んだらどうだろうと思って、人の見ぬところでお札を踏んでみたところが何ともない。

「ウム何ともない、コリヤ面白い、今度はこれを洗手場に持って行ってやろう」と、一歩を進めて便所に試みて、その時はどうかあろうかと少し怖かったが、あとで何ともない。「ソリヤ見た事か、兄さんが余計な、あんな事をいわんでもよいのじや」とひとり発明したようなものだが、こればかりは母にもいわれず姉にもいわれず、いえばきっと叱られるから、一人でそっと黙っていました。

神様のお札を踏んだだけではない。諭吉少年は稻荷の神体さえ投げ捨てた。年寄り連中が稻荷様を拝んでいるのを見て、「稻荷様の正体は何だろう」と社の中をあけてみる。

すると、木の札が入っていたのでそれを投げ捨て、代わりに石を入れておいた。

隣家の下村という屋敷の稻荷様をあけて見れば、神体は何かの木の札で、これも取って棄ててしまい平気な顔をしていると、間もなく初午になって、幟を立てたり太鼓を叩いたりお神酒を上げてワイワイしているから、わたしはおかしい。

「馬鹿め、おれの入れておいた石にお神酒を上げて拝んでいるとは面白い」と、ひとり嬉しがっていたというようなわけで、幼少の時から神様が怖いだの仏様有難いだのいう事はちょいともない。

ト 篓呪詛いっさい不信仰で、狐狸が付くというようなことは初めから馬鹿にして少しも信じない。小供ながらも精神は誠にカラリとしたものでした。

いつの時代にも幻想に捕らわれ、物の見えない人はいる。いつの時代にも迷信、風俗、慣習にとらわれない、醒めた目を持った人もいる。時代は進み、生活は豊かになったが、われわれの判断力は、兼好法師や福沢諭吉に遙かに及ばないようである。